

## マクシミリアン・ソールとフランス地理学

竹 内 啓 一

### 一 最後のヴィダリアンの死

一九六二年八月一〇日、休暇をすごしていたブルゴニユのメッシニイの田舎で、ソルボンヌの名誉教授、フランス地理学会(A.G.F.)副会長、レジオンドヌール、文化勲章受勲者等々数えきれないほどの肩書きをもったマクシミリアン・ソールが急逝した。八二歳の高齢で、みづから「科学的遺言」(testament scientifique)とよんだ最後の大著「大地の上の人間——人文地理学概説」(L'homme sur la terre, Traité de Géographie Humaine 1961)を完成していたのであるから、急逝という言葉は適当でないかもしれないが、学会の例会には必ず出てきて発表者に鋭い質問の矢をむけ、「地理学年報」(Annales

de Géographie)を主宰して、毎号の如く書評欄に筆をとって内外の文献の紹介を精力的に続けていたソールを知る者にとっては急逝としかいいようのない死であった。彼がずっと主宰した「年報」<sup>(1)</sup>は、早速、かつてソール批判の文章をいくつか書いたジュールジュ(Pierre George)に長い追悼の文章を書かせ、さらに、後には、彼の全業績のリストを特集した<sup>(2)</sup>。彼が長い間、国際地理学連合(IGU)の副会長をつとめていて、国際学界における名士であったことにもよるが、フランスの学会誌のみでなく、各国の地理学会の機関誌が、彼の死を大きく報道した。それは、学界の儀礼的慣習である以上にフランスにおいてのみでなく、各国の研究者にとって、ソールの業績、その思想の体系が、その影響を強くうけたにせよ、

あるいは、それに強く反撥したにせよ、無視することのできない大きな存在であったからであろう。フランスをはじめ、各国の、現在活躍している地理学者の中には、若い時、ソールの著作に親しみ、その生態学的な考え方あるいは、「人類の一体性」とか「自然に対する人類の積極的活動の重視」ということをヒューマニズムという言葉と結びつける彼の思想に、あるときには大いに共鳴し、あるときには、それをのりこえようとしたことを告白する人が非常に多い。

しかし、ソールの経歴をみればわかるように、彼が直接後進の指導に当るようになったのは、一九四〇年、ドゥマンジヨン (Albert Demangeon 1872—1940) の後任としてソルボンヌの人文地理学教授<sup>(3)</sup>になってからのことであり、それまでは、エックス・マルセーユ大学の総長 (recteur) や文部省内の局長などの行政的な仕事を、ヴィシー政府の命でやめるときまでしていたのであって、歴代のソルボンヌの教授に比して、その在職期間はわずか八年で非常に短かく、かつ、独軍占領下から戦後の、学問研究にとっての諸条件が最も悪かった期間だったのである。それでは、日本流に言えば還暦を迎えてから大学

に返り咲いた地理学者が、その尨大な著作によって、あれだけ大きな影響力をもつことになった理由は何であったのであるか。それは、ある意味では、ソールの個人的な力によるというよりも、フランスの近代地理学の伝統の力によるものであったと考えられる。すなわち、ソールほど、フランスの近代地理学の伝統ということを口にし、その伝統的方法論の有効性を維持するために努力したひとはなかったのである。われわれが、地理学の修業をはじめたとき、ソールの著作が、手引きとして大きな役割をはたしたとすれば、それは、そこに、われわれが、古典といわれるものの中に見出しながら、生きている現実を対象にした学問研究にたちむかうとき、どのようにして有効性を確認したらよいかわからなくなる諸概念のすぐれた現代化があったからでないだろうか。ソールが、人文地理学を生物学的基礎の上に人類生態学として理解しようとしたのは、「人文地理学は生物地理学の一部門としてのみ考えられる<sup>(4)</sup>」として、科学としての人文地理学を確立したラッツェル (Friedrich Ratzel 1844—1904) に共感して、人文地理学と生物地理学一般との方法論的な共通性に注目したヴィダール・ドゥ・ラ・ブ

ラーシェ (Paul Vidal de La Blache 1845—1918) の伝統を、一九四〇年代の学問的状況の中で再確認しようとした努力の結果だったのであり、集落地理学や地域論を、生活様式 (*genre de vie*) という概念に修正を加えた上で、その上に体系だてようという試みも、その有効性が、外国の研究者や自国の若い世代によって疑われた。ヴィダール・ドゥ・ラ・ブラーシェの生活様式論なしには、理解できないのである。

一九五七年に編まれた「二〇世紀中葉におけるフランス地理学」の中で、ソールは「フランス地理学」なる項目を執筆して、一九四〇年以降のフランスにおける地理学研究を概観しているが、ここにおいて、彼は、五〇年前に比較して事情が非常に違ってしまったこと、すなわち、地理学にとっての隣接科学諸部門の非常な進歩は、地理学の立場を、ヴィダール・ドゥ・ラ・ブラーシェの頃とは違ったものにしてしまったし、ヴィダリアンと呼ばれるべきヴィダール・ドゥ・ラ・ブラーシェの直弟子が、自分をのぞいて、すでに皆この世にないことを認め、た上で、ヴィダール・ドゥ・ラ・ブラーシェの伝統が、尚生きていることを確認している。彼が指摘するその伝

統とは、「全体的なみかた」ということなのであるが、それではソールのこの確信は、その後におけるフランスにおける地理学研究の方向によって、はたして証明されているであろうかということが、ここで問われなければならないであろう。ソールが、この文章を書いた一九五〇年頃より、自然地理学の研究は益々純粹自然科学的方向をとるようになってきたし、「生活様式」という言葉を用いなくても、社会・経済的機能の分析によって、地域の構造は解明されうるといふ考え方は益々強まってきたのである。たとえば、機能地域という概念を、実証的な資料によって極めて詳細に追求したラバス (Jean Labasse) の研究<sup>(8)</sup>に対する彼の高い評価<sup>(7)</sup>にみられるように、ソールは、新しい研究方向に対して、非常に敏感であったし、それを自己の体系の中にとりいれようとした。このようにして、ソールは、一九六〇年代まで生き残った最後のヴィダリアン<sup>(8)</sup>として、フランスにおける地理学研究の新しい展開をはっきりと認識していたのであるが、同時に、そこには、自らの体系が、結局はよってたっていたところのヴィダール・ドゥ・ラ・ブラーシェの方法論の限界、いかえればヴィダリアンとしての限

界があったのである。

ソールの死を、最後のヴィダリアンの死としてとらえるのは、単にそれを、ひとつの理論体系の止揚の象徴として理解する以上に、彼の死の後にフランス地理学界におこったラディカルないくつかの変化——大学における地理学教育に関する制度の改正、七〇年以上創刊号の様式を踏襲してきた「年報」の体裁が一九六四年からすっかり変わったこと、ソールが反対し続けた「応用地理学」なるものの隆盛——を理解する鍵にもなるのである。ソールについては、フランスにおいても、日本においても、あるいは彼の理論的体系について考察し、あるいは彼の業績をたたえる文章がいくつか書かれている<sup>(9)</sup>。他方、ソールが、自らそれに属することを説き続けた「フランス地理学派」(Ecole géographique française)なるものについても、すでにいくつかのすぐれた考察<sup>(10)</sup>が書かれており、いまさら筆者が屋上屋を架す必要はないように思われる。ここで、筆者が、マクシミリアン・ソールについて、あらたに一文を加えるのは、フランス地理学派の理論的遺産の継承という観点から彼を吟味し、同時に、二〇世紀の中葉においてアクチュアルであろうとし

たヴィダリアンとしての彼の地理学が、現在のわれわれにとってもつ意味は何であるかということを考察するためなのである。過去の地理学者として葬り去るのには、ソールの地理学、というよりも彼がなくなってわれわれのもとにまでもたらしたフランス地理学派の貢献は余りに大きく、今尚、現代的意義をもっているのである。

- (1) P. George: La vie et l'œuvre de Max. Sorre, *Annales de Géographie*, 1962 pp. 449—459
- (2) F. Grivot: Bibliographie des œuvres de Max. Sorre, *Annales de Géographie*, 1963, pp. 186—191
- (3) ジョントビッチによれば、正々に教授に任命されたのは、翌一九四一年のことであると云う。
- (4) F. Ratzel: *Anthropogeographie I* (1891) 序論の第一頁にある言葉である。
- (5) *La géographie française au milieu du XIXe siècle*, L'Information Géographique, 1957 pp. 333
- (6) J. Labasse: *Les capitaux et la région*, Étude géographique, Essai sur le commerce et la circulation des capitaux dans la région lyonnaise, Paris, 1955 pp. 532
- (7) ソールは、ランスのこの仕事を「広義の交通 (circulation) が地域構造を形成するのに果たす大きな役割を解明しためとして高く評価した。(Max. Sorre: *Rencontres de la géographie et de la sociologie*, Paris, 1957 pp.

100—103)

(8) ポール・ヴィダール・ドゥ・ラブラーシユの晩年に、この師に接した地理学者としては、グルノーブルのプランシヤール(R. Blanchard)をはじめ、数人の方が健在であるが、ヴィダールの地理学的立場から出発して、自己の地理学の体系を主張したという意味でのヴィダリアンならば、ソールをもって最後としたということができよう。

(9) ソールについては、日本でも谷岡武雄・松田信の両氏によって、すでにいくつかの論考が発表されているが、この小論執筆に際して参考にする点の多かったのは下記のものである。

谷岡武雄：フランス学派における生活様式概念「立命館文学」第一二二号 一九五六年 …マクシミリアン・ソール「地理」第九巻第九号 一九六四年

松田信：生活様式論再考「人文地理」第十三巻六号 一九六一年 …景観と生活様式「人文地理」第十七巻二号 一九六五年 …人類生態学——マックス・ソールの立場 大阪学芸大学紀要 A、人文科学 第十三号 一九六四年

(10) この小論執筆に際して、特に参照したものをあげておく。

A. Cholley: Tendence et organisation de la géographie en France. *La géographie française au milieu du XIXe siècle*. op. cit. pp. 13—25

R. J. H. Church: The French School of Geography. *Geography in the 20th Century*. G. Taylor, ed., New

York-London, 1953 pp. 70—90.

飯塚浩二：地理学批判、社会科学の一部門としての地理学 一九四七年 特にその第六章 ポール・ヴィダール・ドゥ・ラブラーシユの生涯とその学風

## 二 フランス地理学派

現在のフランスの学界についてみた場合には、その存在を否定するひとでも、すくなくとも、二〇世紀の前半を通じて、フランス地理学派 *École géographique française* の名で呼ばれるべき、明瞭な学問的傾向によって特色づけられるスクールがフランスに存在したことを認めるのには、やぶさかでないであろう。ひとつのスクールの存在が認められるためには、何人からの研究者の学問的傾向の類似だけでなく、それらの研究者を結びつける組織なり人的関係、さらには、そのような研究傾向の新しい世代を養成して、スクールの発展・継承を可能にするような制度の存在することが、必要な条件になるであろうが、二〇世紀の前半のフランスの地理学には、まさに、このような条件をみたすスクールが存在したのであり、地理学についていえば、ひとつの国に、このように明瞭な形で、ひとつだけのスクールが成立したのは、フラン

スにおいてだけみられたことでもあったのである。

フランス地理学派の成立は、文字通り師<sup>メイトル</sup>として、その理論的基礎の確立に關しても、師弟關係を通じてのグループの形成に關しても、申し分なき指導力を發揮したポール・ヴィダール・ドゥ・ラ・ブラーシユに負っているのはいうまでもない。パリの高等師範<sup>エコール・ノルマル・シュペリユール</sup>学校とソルボンヌで教鞭をとった彼の役割を、これほどまで大きくしたのに、あずかって力あったものとしては、フランスの文化的中央集権主義、特にフランスの学界においてしめた高等師範<sup>ノルマル・マリアン</sup>卒業者の比重の大きさ、といったような事情も指摘されようが、「史学の侍女<sup>(1)</sup>」と呼ばれたのも無理もないような、考証学的な補助科学でしかなかった地理学を、ひとつの独立した統一科学としてフランスにおいてうちたてたのは、やはりヴィダール・ドゥ・ラ・ブラーシユによる大きな理論的貢献なのである。

一八七七年、母校のパリ高等師範に招かれて、後にヴィダリアンと呼ばれるようになる沢山のすぐれた弟子を育てあげ、エコール・ノルマルのカリキュラムにおける地理学の比重を飛躍的にひきあげ、一八九二年には、「地理学年報」(Annales de Géographie)を創刊、一八九

八年にはソルボンヌに招かれる、というヴィダール・ドゥ・ラ・ブラーシユの経歴に示されるフランス地理学派の草分の時期は、たしかに、フランスが植民地経営に積極的のりだした時期であり、諸外国の地理学者によるアフリカや中央アジアの調査の進展にもうながされて、国策の見地からも、一般人の海外に対する関心という面からも、地理学がもてはやされた時期であったが、ヴィダール・ドゥ・ラ・ブラーシユにひきいられたフランス地理学派の研究方向は、極めて科学的<sup>アカデミック</sup>なものであった。

「科学とは縁もゆかりもないことながら地理学の迷彩をほどこす」ことに反対するという「年報<sup>(2)</sup>」の発刊の辞にもこの態度は示されているし、フランス地理学派の機関紙の趣のあったこの雑誌の上で、自国の領土的関心にもとづいた議論が展開されることは、決してなかった。のちの、ドゥマンジョンのゲオポリティクに対する批判<sup>(3)</sup>も、このようなフランス地理学派の伝統的態度にもとづくものであった。

それでは、ヴィダール・ドゥ・ラ・ブラーシユの、そしてまた、ガロワ (Lucien Gallois 1857—1941)、ブリュン (Jean Brunhes 1869—1930)、ヴァンジモン、ドゥ、

マルトヌヌ (Emmanuel De Martonne 1873—1955) などのヴィダリアンの学問的特色はどのような点にあったのであろうか。「地理学とは書物の学問ではない」という信条のもと、世界の広い地域を旅行したヴィダール・ドゥ・ラ・ブーシユは、それぞれの地域が、地形・気候・植生・人類の生活などの特色の中に、みずから表現された固有の統一性をもっていることに注目し、かの「フランス地理」(Tableau de la Géographie de la France, 1903)にみられるように、この地域的な独自性について、すぐれた表現を与えたのであった。この書がラヴィス(Ernest Lavisse)の編纂する「フランス史」の第一巻としてでたとき、ひとびとは人文地理学書が、単なる好奇心の対象とは違ったものであることを知るとともに、その高い科学的な内容と見事な表現形式の羨むべき結合に注目したのであったが、ここで、地域的独自性への関心とならんで、彼の地理学を特色づけたのは、そのような、地域の自然的、社会的特徴を、統一的に理解する方法論であったのである。フォン・フンボルト(Alexander von Humboldt 1769—1859)やリッター(Karl Ritter 1779—1859)にはじまるドイツ地理学に若い頃からしたしんでいたヴ

ィダール・ドゥ・ラ・ブーシユは、ラッツェルにいはやく共鳴して、「人文地理学は、その起源と名称とを、植物地理学及び動物地理学と呼ばれる科学を成立させたのと同じ根柢から得ている」<sup>(3)</sup>とのべているのであるが、このような生態学の問題のとらえ方と、地誌的な研究への志向とを統一するものとして、彼独自の「生活様式」(genre de vie)という概念がでてきたと考えることができるのである。「生活様式」を、社会集団が、その存続のために営む習慣の総体<sup>(4)</sup>として、ある程度、安定または固定したものと考えることによって、人類の生活の地域的多様性は、生活様式の多様性の反映として理解されることになる。人文地理学が、ラッツェルによるところの「自然と人類との間、舞台と歴史との間の相関関係」を重要な主題とするものとヴィダール・ドゥ・ラ・ブーシユが考えていたことは、彼の遺著「人文地理学原理」(Principes de géographie humaine, 1922. 飯塚浩一訳 岩波文庫)において、地球上における人類の分布の問題を大きくとりあげ、それを食物連鎖を媒介として、環境との関連で考察していることから知られるのである。しかし、問題を、まさに「生活様式」を通じて常に考察した

が故に、彼は、ラツヴェルとちがって、いわゆる地理学的法則に対して関心を示さなかつたし、逆に、たとえば、遊牧民と農耕民の境界領域における如く、二つ以上の生活様式の可能性の存在を指摘したのである。

このようなヴィダール・ドゥ・ラ・ブラーシユの立場と、いわゆるフランス地理学派に属する人たちの学問傾向との間には、さきにも述べたように密接な関連があるのであるが、これをまったく同一視してしまふことは、いわゆるフランス地理学派なるものに関する理解を誤らせることになる。師の遺著を編んだドゥ・マルトンヌは、「人文地理学原理」への序言の中で「類書に比してこの遺著に最も新しくみえるところは史学的見解の透徹し」ている点であることを指摘しているが、ヴィダール・ドゥ・ラ・ブラーシユが、生活様式の多様性を説明するのに、しばしば、歴史的事情ということ云々したからといって、彼が、歴史科学としての地理学ということをどこまで意識していたかは疑問である。彼が交通の発達、異なる生活様式の接触による文明の、あるいは集落の進化ということを多くの箇所でのべているとしても、彼は、たとえば集落の地域的類型の起源ということ

を考えたことは決してなかった。ドゥ・マルトンヌは、師の遺稿を整理・刊行したのとおなじ一九二二年に、

「動植物の社会 (associations) を説明するために進化を考慮する必要があるとすれば、人文地理学に於て歴史的な見解が重要な役割をもつべきことについてははるかに強い理由がある。人類の集団は進化する」とのべているが、この言葉こそ、むしろ師の思想的立場の影響を強くうけたものと考えられるのである。すなわち、彼の歴史的な見解は、むしろ、生物学とのアナロジーに由来していたと考えるべきであろう。したがって、フランスにおいて、ヴィダールの時代以後、長い間、歴史学と地理学<sup>アグレガシオン</sup>の高等教授資格を一体不可分のものにする制度が存在した<sup>5</sup>ことと、「人文地理学原理」におけるヴィダール・ドゥ・ラ・ブラーシユとを結びつけて、フランス地理学派の学問的傾向として歴史主義をあげるのは、皮相な理解にはかならない。ブロック (Marc Bloch) などの社会経済史家によって高く評価されたフランス地理学派の仕事とは、ドゥマンジョンのピカルディ地誌<sup>(5)</sup>などのモノグラフ<sup>5</sup>における実証的データの集積だったのである。

フランス地理学派の特色を、その環境論にみるのは、



決して見当ちがいではなく、一九四二年に刊行されたドゥマンジョンの遺稿においても、地理学が「関係の科学」として定義され「絶対的決定論ではなくて、人間のイニシアティブによって実現された可能性」が強調されていたのである。しかし、ここではっきりと区別しておかなければならないのであるが、ヴィダール・ドゥ・ラ・ブラーシュが言葉としては用いなかった「可能性」ということを強調したのは、心理的相対主義 *relativisme psychologique* としてしばしば批判されるプリューンにはじまるヴィダリアンたちであった。この、いわゆる可能論 *possibilisme* の対立物であったところの、アメリカのセンブル (Ellen Churchill Semple) などのラッツェルの垂流の決定論 *determinisme* が、ラッツェルの生物学主義と離れがたく結びついている国家有機体説——すなわち *Politische Geographie* におけるラッツェル——を捨てたところと成立していたのに、事情は似ているのであるが、ヴィダール・ドゥ・ラ・ブラーシュの弟子たちの多くによるいわゆる可能論は、師が、ラッツェルから学んだ生態学的な観点を無視したところに成立していたのである。石炭は人間がエネルギー源であることを知

らなかったならば、ただの石と変りない、といったような説明は、一見気がきいているし、センブル流の結論に対する反論としては有効であっても、石炭を利用する社会経済的条件の解明という研究の創造的な発展をもたらすことはないであろう。フランス地理学派の創造性は、環境論の理論的深化によってではなくて、ヴィダール以来の伝統である地域の実証的研究によって維持されていたのであり、もし、何らかの外部的事情によって、地域研究が不可能になったり、あるいは、地域研究というものが、地理学者だけによってなされるものではなくなるような事態になれば、フランス地理学派そのものが、その存在理由を反省することになる可能性を、自らもっていたということができるのである。

フランス地理学派の性格を、このようにして明らかにすることによって、前節で提示した問題、すなわちマクシミリアン・ソールがフランス地理学に対してもった意味にたちかえて考えることができる。

ノルマリアンではないソールは、ヴィダールのスクールでは傍系に属するが、ヴァンデ県のラ・ロシュニエール・リイオンの師範学校教授の時代にドゥ・マルトンヌ

の知遇をえた頃以来、ヴィダール・ドゥ・ラ・ブラーシユと彼の弟子たちと接触するようになり、一九一三年にはパリ大学文学部へ学位論文「地中海ピレネ」(Les Pyrénées méditerranéennes. Etude de géographie biologique)を提出している。ソールが生物地理学の方向に関心を深めていったのは、第一次大戦前、モンペリエの師範学校で教鞭をとっていた時代に、モンペリエ学派の名で呼ばれるフランス植物生態学の創始者フラオー(Charles Flahault)に師事したことによるものである。ソールが一九六一年の最後の著書の扉に、ヴィダール・ドゥ・ラ・ブラーシユ、ドゥ・マルトンヌとならんで、三人の師の一人としてフラオーの名をかかげているのを見ても、ソールの地理学にとって、モンペリエ学派の群生態学的方法にもとづく生物地理学が大きな意義をもっていることが知られる。生態学的観点は、ソールにあっては、ヴィダールにとってのように、地理学を独立科学たらしめるための理論的基礎を提供するためのものである以上に、植物を含めての環境と人間の関係、総体としての生態系を把握するためのフィールドワークの方法であったのである。地中海地域のエクメネを制限する諸条件のもとで、

海岸型、山地型などの生活様式の類型がいかにして成立しているかをみる彼の方法は、本質的に、生物地理学のそれであり、これが、地中海地域では、偏在する史料にたよる歴史的方法以上の成果をあげたのであった。この点において、ソールは、生物学の基礎の上にヴィダール・ドゥ・ラ・ブラーシユの生態学的観点を継承したといえるのであり、地理学の環境論から生理学的考察の側面を迫放することを宣言したドウマンジョンとは対蹠的である。

第一次大戦で瀕死の重傷を負って、一時研究生活の中断があるが、戦後は、一九三一年まで、ボルドー、ストラスブル、リールの諸大学につとめ、この間に、アルマン・コランの小冊子「ピレネ」(Les Pyrénées, 1922)や *Géographie Universelle* の叢書に「メキシコ・中央アメリカ」と「地中海地域」の二冊 (*Mexique, Amérique Centrale. Géographie Universelle*, t. XIV, 1928, *Méditerranée. Pyrénées méditerranéennes. Géographie Universelle*, t. VII, 1934)を執筆してゐる。この世界地誌の叢書は、ヴィダール・ドゥ・ラ・ブラーシユによりはじめ企画され、彼の死後、フランス地理学派の総力を結集して、一

九二七年から一九四八年の間に二十五巻を刊行して完成したものであるが、この中の二巻にソールが執筆したということは、彼が、名実ともに、フランス地理学派の中心的人物になっていたことを物語るものであろう。他方、両大戦の間は、彼の生態学的方法を、人体と自然環境の關係のような医学的基礎から出発して、技術的基礎からみた都市発達の研究のような集落現象や経済現象にまで適用した数多くの論文を発表する時期である。やがて第二次大戦後の「人文地理学の基礎」三巻四冊にまとめられることになる彼の地理学の体系が、思索と内外の文献の精通によって形成されてくる時期である。尚、一九三一年以降教育行政の要職にあったことにもよるが、ソールは、他のフランスの地理学者ほど、広く世界中に足をのばしてはいない。特に、フランス地理学派の海外研究の主要フィールドであったアジアとアフリカの熱帯・亜熱帯地域での調査研究は全然なく、これらの地域に関する彼の知識は、すべて文献の綿密な検討からえられたものである。

彼がソルボンヌの地理学教室を主宰したのは、さきへのべたように、ドイツ軍占領下から、第二次大戦後の混

乱期という異状な時期であった。ドゥマンジョン、シオン (Julien) などのヴィダールの高弟は病没し、フランスの農村集落の類型化の研究という点で人文地理学者との交流も深かったブロックはゲシュタポによって銃殺された。戦乱のために、海外諸地域の研究のみでなく、フランス国内においてもフィールドワークは殆んど不可能であったし、そのようなモノグラフィの発表の機会もは全然なかった。多くの地理学者がこの時期に方法論上の思索にむかっただのは、ひとつには、このような外部的な事情によるのであり、他方、たとえばドゥマンジョンの集落研究が、一九三〇年頃から集中と分散に関心をしぼることによって、形態論的な袋小路(7)におちいっていったというように、フランス地理学派の学問内容そのものが、根本的な反省を必要としていた結果でもあった。ル・ラヌ(8) (Maurice Le Lannou) や ショーレイ (André Cholley) の概説書もこのようなフランス地理学派の方法論的反省の上になされたものであると考えられるのであるが、このような方法論上の検討を、環境論、生活様式論、さらには集落地理学上の諸概念に関して、もっとも広範に、かつ徹底的におしすすめたのが、マクシミリアン・ソール

ルであつたのである。

- (1) 測地学や数理地理学の分野では、十九世紀のフランスは世界の学界をリードする地位にあつたが、地理学の名のつくものは、むしろ歴史地理学の形において存在していたにすぎない。ヴェグナー・ドゥワラ・ブラーシユの前任者として、ソルボンヌの地理学教授のポストを四〇年間しめたりイムリ (M. Himly) の関心は、歴史の地理的背景特に、ヨーロッパにおける各国の領土の形成が、地理的條件とのような関係をもつていたかどうかが中心であつた。
- (2) A. Demangeon: Géographie politique. *Annales de Géographie*. Tom. 41, 1932. この論文は *Problèmes de géographie humaine*. 1942 に収録されている。
- (3) P. Vidal de La Blache: La géographie humaine. Les rapports de la géographie humaine avec la géographie de la vie. *Annales de Géographie* Tom. 12, 1903. この論文は、飯塚浩二訳「人文地理学原理」(岩波文庫) 下巻に附録として訳載されている。
- (4) P. Vidal de La Blache: Les genres de vie dans la géographie humaine. *Annales de Géographie* Tom. 20, 1911 pp. 193—212, 289—304
- (5) A. Demangeon: *La plaine picarde: Picardie, Artois, Combrésis, Beauvaisis. Étude de géographie sur les plaines de craie du Nord de la France*. Paris, 1905
- (6) この書籍は、ドゥワラ・ブラーシユ (Max. Derruau) によって編纂されている。(Précis de géographie humaine. Paris, 1961 p. 11)

(7) ブロックにおいても、その中心であつたように (M. Bloch: *Les caractères originaux de l'histoire rurale française*. Oslo, 1931, Paris, 1952) 開放耕地とか散居とどう形態上の特徴を、農村史、農村文明 (civilisation rurale) と直接結びつけて考えることに、フランス地理学派による集落形態の研究はその基礎をおいていた。もし、この基礎がくずれて、耕地と住居との関係のもつ意味は、簡単に類型化できないものであり、地籍図などの史料や花粉分析などの農業史研究のデータによって、開放耕地や閉鎖耕地の意味が考え直されなければならぬといふことになつたとき、たとえば、散居率の計算などの方向に精緻化したドゥマンジョン的方法は、そのもつ意義を失つてしまつたわけである。このことは、ドイツやイギリスにおける集落史研究と結びついた集落地理学との比較の上に、フランスの集落景観の展開が、考え直されなければならないといふことが、農村史の研究者や、実際に地域研究にたずさわる若い世代の地理学者によって痛感されるようになったことと軌を一にする。

(8) M. Le Lannou: *La géographie humaine*. Paris, 1944

A. Cholley: *La géographie. Guide de l'étudiant* (この本の第一章・第二章は山本正三・正井泰夫・田中真吾訳: 地理学的方法論的考察、一九六七年に訳載されている)。

### 三 ソールの生態学的方法とその限界

一九四三年から一九五二年の間に発表された「人文地理学の基礎」(Les fondements de la géographie humaine)は、結果として、ソールの地理学を体系的に提示した四冊の名著となっているが、当初からこのような体系化を予定して発表されたものでは決してない。特に「生物学的基礎、人類生態学の研究」(Les fondements biologiques, Essai d'une écologie de l'homme, Paris, 1943 pp. 448)は、彼がソルボンヌに招かれる前、一九四〇年頃にはすでに書きあげられていたものであって、発表当時は、「人文地理学の生物学的基礎」と題されていたことから、これがモンペリエ時代からの彼の研究の総括として、人文地理学にとっての、生物学的方法の有効性の目録を作成するのを目的としたものであったことがわかるのである。まず生物体(organisme)としての人間——彼の言葉によれば *homotherme à peau nue*——が、温度、高度などの物理的環境との間に示す関係が概観され、次に、この生物体としての人類が、自ら選択するところの他の生物体、すなわち家畜、作物と共生関係 *symbiose* にある

ことが主題としてとりあげられ、食制(*régime alimentaire*)や病因複合(*complexe pathogène*)の問題がこれとの関連で考察されている。ここで取り扱われている諸問題は、たしかに、かつてハンチントン(*Elsworth Hutton*)<sup>(1)</sup>などの決定論者によってとりあげられたものであるが、この「人文地理学の基礎」第一巻におけるソールは、これを自然科学としての生態学の次元でとりあげているのであり、かつ、その生態学が、極めて人間中心であるのが、その特色である。すなわち、常に人間を中心にして *symbiose* を考えているにすぎない。したがって、生態学の次元では、本来、人間を、社会的・歴史的存在としてとらえるところで問題になる環境論は、問題になりえない。自然科学としての生態学は、環境論の問題とはちがう次元にあるのである。この点で、この第一巻におけるソールを批判して、環境決定論の焼き直しだというのは、粗雑で的はずれな議論なのである。

生態学的次元で問題になるのは、*optimum* ということ、いいかえれば、生態的均衡ということであり、ここでの分析の方法は定量的なものである。「人文地理学の基礎」第一巻の結論部では、しかしながら、人間とエウク

メネの関係を optimum でないものにするものとして心理的要因が留保事項としてあげられ、さらに、生態的均衡の質的側面の問題になるものとして、社会組織、あるいは、より一般的に技術の問題が指摘されている。要するに、人間集団は、技術によって武装されるし、広い意味での、この技術的武装は、社会組織に関連するという

ことを、人文地理学の問題としては、指摘しないでおくわけにはいかなかったのである。食物連鎖からみた生態系をとってみても、あるいは病因複合をとってみても、貧乏人と金持ちとではそのもつ意味がちがう、という極めて常識的なことにすぎないのであるが、この根本的な問題が一貫した理論体系の中で説明されなにかぎり、ここで展開された人類生態学 *écologie de l'homme* が、なぜ人文地理学 *géographie humaine* の基礎たりうるのかという肝心なことがわからないことになってしまふ。したがって、もともと独立した書物として書かれたこの「人文地理学の基礎」第一巻は、社会組織をも含めての技術的基礎を考ふる第二巻 (*Les fondements de la géographie humaine*, Tom. II, *Les fondements techniques*, Paris, Première Partie 1948, Deuxième Partie 1950 pp. 1031) に発展

する性質をもつものであったということができるのである。

ソールは、この第一巻から第二巻への展開は、まさに *Natura non nisi parendo vincitur* の言葉にもとづいたパスpekティヴの変化であって、そこには、生態学的方法がたらぬかかっているとべている。しかし、この第二巻で扱われている内容、すなわち、「社会生活の技術」としての社会組織、エネルギーを動員するための技術、「空間征服の技術」としての交通・通信、そして生産諸技術などをみるならば、ソールのいう「生態学的」*écologique* という言葉の意味が、一巻と二巻との間において、非常に違っていることに気がつくのである。「社会生活の技術」は、それが人間の自然に対する働きかけを最も有効たらしめるとともに、その技術自体がエクメネの形成に条件づけられている、と考えることが「生態学的」であるとすれば、その基礎には、社会集団を、ひとつの生物体 *organisme* とみなすアナロジーがある筈である。同様にして、「労働(力)の地理」(*géographie du travail humain*) を「エネルギー利用の地理の一環としてとりあつかう場合には、エネルギー転化の法則の、

人間労働へのアナロジカルな適用と、それをささえる生物学的一元論がそこにみられるのである。

この「人文地理学の基礎」第二巻は、一九四〇年代における経済地理学あるいは社会地理学と呼ばれるべきものの諸成果の総合と、その体系化のひとつの試みである。疑いもなく、それは偉大な業績であるが、その体系化にあたって、ソールは、第一巻でしめされた生態学的方法の限界を、社会科学の次元で検討するかわりに、生態学的方法なるもののアナロジーによる広範な適用を試みたということができよう。エンサイクロペディックな地理的知識の総合が、このようにして、結局、物質代謝の均衡の分析に還元される生態学的方法によって体系化される<sup>(3)</sup>とき、脱落してしまう大きな問題は、社会組織、交通・通信から生産技術にいたるまでの、ソールによるところの「広義の技術」相互の関係如何ということであり、もう一つは、このような技術の進化というものをどう考えるかということであろう。

この後の問題については、ソールは、第二巻および別の論文<sup>(3)</sup>において、広義の歴史という意味でサクセッション、すなわち歴史民族学的方法をも含めて遷移の復元の

科学ということをもって、その研究における生態学的精神の必要ということを主張しているが、歴史の問題に関しては、ソールは、環境論的な説明をすぐしたがる一部の歴史家のような強引さや、あるいは、植物遷移のアナロジーから、歴史の地域的類型を思いつきのにのべる一部の文時批評家のような乱暴さはない。技術の進化という問題も、技術の複合としての生活様式を考え、そのような生活様式との関連で集落や地域の問題を考えると、最も人文地理学的なテーマの第三巻(*Les fondements de la géographie humaine. Tom III. L'habitat. Conclusion générale. Paris, 1952 pp. 482*)にもちこされたのである。

フランス地理学派に固有な概念として、ヴィダール・ドウ・ラ・ブラーシュ以来多くの地理学者によって用いられてきた「生活様式」の概念を、ソールは一九四九年の論文<sup>(4)</sup>において検討しているが、ここにおいて、生活様式<sup>(4)</sup>というものが、組織された社会と切り離しては考えられず、社会集団は生活様式を通じて地理的環境と関係するのであるから、それは、第二巻でとり扱われた技術の総体にはかならないことが、まずのべられている。このように定義された生活様式は、もはや、ヴィダール的な固

定したのではなく、新しい環境への適応、生活様式の新しい要素の導入、交通による生活様式の接触を通じて進化するものであり、またソールは、生活様式概念に、大都市の生活など、変化してやまない適応のしかたを含めて理解することを主張したのである。「人文地理学の基礎」第三巻が、そのような生活様式論の検討からはじめられているのは、諸生活様式が、巨大都市からさまざまな性格の農村にいたるまで、各種集落に具体的に表現されていると考えて、生物学的基礎から出発して、技術的基礎をへて到着した彼の体系を、この生活様式論を通じて、地域論や集落地理学など、人文地理学の中心的課題に結びつけようとしたからにはかならない。すなわち生活様式の具体的表現として景観  *Paysage*  を考えるならば、景観は、いくつかの種類の集落  *habitat*  として地球上に存在するわけであり、他方、比較的安定した環境条件の総体と均衡状態にある単一の生活様式の社会集団のみられる「基本地域」  *région élémentaire*  から、文明  *civilisation*  にいたるまでの、生活様式の結合  *association*  からなるいくつかの段階の「地域」が認識されるわけである。ここに、生活様式の結合の段階によって考えられた

地域の階層制  *hiérarchie*  という概念がでてくるわけであり、逆に、このような地域の階層制がいかに形成されてくるかということ考察することによって、生活様式の諸要素の機能を明らかにすることができることになるのである。「人文地理学の基礎」第三巻の結論部は、このような立場から考察された文明論のページとなっており、一九六一年の最後の書物「地上における人間」においては、景観という概念が表面に出ているが、基本的な立場は、この第三巻における地域論のそれと変わっていない。

この第三巻において、ソールは、生態学的方法ということ、 *écologique*  という言葉を用いては主張していない。しかし、生活様式の要素として、可視的なものも不可視的な住民のメンタリテイのようなものをも考える、あるいは、生物的要素から、社会経済的、制度的要素まであわせ含むものと考えるとすれば、これらの要素に統一を与えるものとしては、 *symbiose*  という生態学的なものしか考えられないのである。このような考え方は、さきにも述べたブロックの  *civilisation rurale*  という概念にも、あるいは、 *combinaison agraire*  <sup>(2)</sup> という



概念にもあったもので、結局のところ、ソールは、ヴィ  
 ダール以来の生態学的伝統を、理論的に最も明瞭な、あ  
 るいはあからさまな形で示したのにすぎないのである  
 が、この、地域的類型化の作業をするのに、一見大変便  
 利な考え方は、地域の性格、その歴史的、発展や機能的  
 特色というものを、社会科学的に考えていこうとするこ  
 ときには、本来、自らの意識的創造や変革ということを含  
 まない *synthèse* のメカニズムにそれらが解消されうる  
 ものであるかどうかという観点から、まず再検討が加え  
 らなければならないのである。

ソールは、生活様式という伝統的概念を、発達した社  
 会、すなわち複雑な分業組織のみられる社会にまで適用  
 するために、たとえば職業別の家族というように、複数  
 の生活様式の多様性 *multiplie* の存在を認めたのであ  
 るが、このように考えていくならば、職業別の生活様式  
 とは別に、社会層あるいは階級別の生活様式というもの  
 も当然考えられなければならない。労働の内容  
 容と、それが生活のリズムに与える影響によって、ある  
 生活様式が決定されるならば、収入の差も生活の質的內  
 容の分化をもたらすだろうという議論がなりたつからで

あり、そうすれば、ソールによってなされた生活様式と  
 という概念の拡大適用は、この概念の混乱しかもたらさな  
 いことになってしまう。この混乱を、いち早く指摘し  
 たのはジュールジュであった、ソールが活動の組織 (*orga-  
 nisation de l'activité*) と生産の組織 (*organisation de la  
 production*) を混乱したことを指摘し、生活様式は、本来  
 この二つの組織が一致する未分化の社会、たとえばエス  
 キモーのような閉ざされた未開社会にのみしか適用でき  
 ないものであるという、フランス地理学派の学説史的展  
 開においてはじめて、まさにこのスクールの理論的基礎  
 にふれる批判をおこなったのである。<sup>(6)</sup> ドゥリュオーは、  
 ジョルジュの観点をさらに発展させて、「地理学は、そ  
 の伝統的な観点を交えなければいけない」として、たと  
 えば、資源の開発ということだけである生活様式が説明  
 できるのではなく、資源の開発ということ自体が、経済  
 的条件に規定されているのであり、もし、このような意  
 味で生活様式を考えるとすれば、生活様式とは、ある社  
 会集団が、経済的・社会的組織に対して示す反応にすぎ  
 なくなるとのべている。<sup>(7)</sup>

これらの、ジョルジュやドゥリュオーによる批判は、

ソールによって代表される伝統的なフランス地理学派の生態学的方法の限界を、はっきりと指摘したものであるということができよう。たとえば、ソールが、地域の階層制というものを発見したのは、決して、自然地域のアナロジーからではなく、彼なりの生活様式概念によって把握した地域というものが、その社会的・経済的機能に関して、そのような階層制を成立せしめる、あるいは、階層的分化を形成する性格を、それ自身もっていて、ソールが、その機能的側面を認識したからにはほかならない。したがって、このような地域的階層制は、ソール流の生態学的方法によらなくても、たとえば、中心地の階層制が、都市機能の分析のみから認識されるように、機能的側面からのアプローチによって発見の可能なものだったのである。

はじめにあげたラバスの研究<sup>(8)</sup>にしたところで、この研究において、生活様式は、もはや分析や説明の手段としてではなく、地域における金融組織の構造と進化の結果としてのべられているにすぎないという新しい事実<sup>(9)</sup>に、ソールは注目すべきだったのである。なぜならば、二〇世紀後半の地理学は、「エクメネに生じた多くの不均衡」

に対して、ソールの生態学的方法以外の、より分析的な方法をも、その研究方法として、獲得したように思われるからである。とすれば、われわれの将来の課題は、むしろ逆に、ソールの生態学的方法が、われわれの分析の中で、どこまで有効であるかという、むしろその積極的側面の評価であるのかもしれない。それは、他のどのような discipline の侍女でもない地理学の立場から、彼の方法論を再検討することを意味するからである。

(1) E. Huntington: *Civilization and Climate*. 3rd ed. New Haven 1924 (間崎万里訳: 気候と文明 岩波文庫)。

(2) その内容からいえば、「労働力の地理」というべきであらう。

(3) Max. Sorre: *Le rôle de l'explication historique en géographie humaine. Mélanges géographiques offerts à Philippe Arbos*, Vol II. Clermont-Ferrand 1953 の 6 篇文の英訳が P. L. Wagner and M. W. Mikesell ed. *Readings in Cultural Geography*. Chicago 1962 pp. 44—47 に収録されている。

(4) Max. Sorre: *La notion de vie et sa valeur actuelle. Annales de Géographie*. 1948 pp. 78—108, 193—204

(5) A. Cholley: *Problèmes de structure agraire et d'économie rurale. Annales de Géographie*. 1946 pp. 81—101 (前掲邦訳「地理学的方法論的考察」に収録)。

- (6) P. George : *Introduction à l'étude géographique de la population du monde*. Paris 1951 pp. 70—74
  - (7) Max. Denuau : *Précis de géographie humaine*. op. cit. p. 112
  - (8) 前掲第一節註(6)参照
- 〔後記〕この小論においては、ソールの重要な著作である「地理学と社会学の交流」(*Rencontre de la géographie et de la sociologie*. Paris, 1957 pp. 213.)と「民族の移動——地理的流動性の研究」(*Les migrations des peuples, essai sur la*

*mobilité géographique*, Paris, 1955 pp. 365)については全然おぼれなかった。はじめの本はいつかは「すべし」に筆者は書評の形でかなり詳しく論じたことがある。「地理学評論」第三二卷三号(一九五九年)の「フランスの本」としては、マキシムの近著(P. George : *Sociologie et Géographie*. Paris, 1966 pp. 215)との関連において、もう一度別の所で考察する予定である。

(一橋大学専任講師)